



第二十四回テーマ
新春講演会「農業は成長産業に変えられる」
 ◆開催日
 平成二十二年一月五日
 ◆会場
 芙蓉閣
 ◆講師
 大泉一貫氏(宮城大学副学長)

◎健康な生活を送るためには体を動かすことが必要。農業体験を増やすことで、健康増進にもつながる。
 ◎心の相談場所は敷居が高いようである。悩みを抱えた人が気軽に参加できるように、サロンのな場所があるとうい。臨床心理士は知識があるので、関係機関とネットワークを築いていければよい。
 ◎高齢者の心の健康に問題がある。家庭で介護できる状態にない高齢者は、一旦入院してしまうと家庭に戻って来られないという不安を抱えている。よりよい対人関係を築き、生活の充実や安心を感じさせることが重要。
 ◎健康推進は多くの分野と知識に支えられている。大崎は地域でよい関係が築かれているので、地域医療が充実していければよい。

◆提言の内容
 ◎農業には、機械を使用することで手間をあまりかけないやり方と、それとは対照的に、労力と手間をかけ、収穫量アップや高品質の農作物を作るやり方がある。稲作も、二つのやり方を組み合わせ、それにプラスして違う農産物を作ればよい方向に進むのではないか。
 ◎大崎市は大豆生産が県内一位で、納豆、豆腐、凍み豆腐、みそなど加工産業もあり、大規模大豆生産者もいる。大豆を中心とした食文化をつくり、大豆を発信して欲しい。
 ◎製造業の盛んなところは農業販売額も大きい。製造業と農業の情報交換が行われている。宮城県に自動車関連産業などが進出し、産業の集積が進むことは大崎市としてもチャンスである。
 ◎大崎市には多くの資源(宝)があるが、それを活用する人、アイデア、実行力が必要であり、住民力をいかに引き出すかが、これから先は重要。



第二十三回テーマ
「生涯を通じた健康づくり市民ネットワーク」

◆開催日
 平成二十一年十二月五日
 ◆会場
 古川保健福祉プラザ
 ◆講師
 高橋郁朗氏(大崎市健康増進計画推進委員長・大崎市医師会副会長)
 ◆パネリスト
 高橋郁朗氏
 木村勝彦氏(田尻産直委員会野菜部会副会長)
 鈴木正貴氏(スクールカウンセラー)
 高橋まする氏(美寿路会会員)

◆提言の内容
 ◎大崎はそれぞれの地域で特色ある農業を行っている。生産している品目数が多くまとまった収量も確保できている。学校も近くにあるので、もっと地場産品を使用した給食の提供が可能である。
 ◎みやぎ食育推進プランでは、地場産野菜などの利用品目数を三十%以上とする目標がある。身近な食材であれば、子どもたちも安心して食べられる。旬のものを提供するので食材の値段

も高くはならず、費用も上がらない。残食も少なくなる効果がある。
 ◎食生活自体がお粗末になってきている。食卓には必ず母親手作りの一品を入れるようにしてほしい。
 ◎最低限の食事ができていない。子どもが小さいころから家族と一緒に調理をすることは大事であり、食材を見分ける力を養うことができる。
 ◎子どもだけでなく、家族も巻き込んでの相談が増えていると感じる。学校給食の方が、家での食事よりも楽しいと感じる生徒もいるが、家での食事をおいしいと感じられることが大切である。
 ◎ある地域の調査で、食事ではなく、サプリメントで栄養を取っている人が九割いるという調査結果があるが、食事から栄養を取ることが重要なので、改善する必要がある。一番大事なのは、楽しく調理しておいしく食べる。昭和三十九年当時、一人当たり百二十キロあった米の消費量が、現在は六十キロを割っている。農家と給食の連携は可能なので、米を食べる回数を増やしてほしい。

市長コラム 飛翔・大崎

二月十四日、本市でラムサールフェスティバルが開催されました。本市には、「蕪栗沼・周辺水田」と「化女沼」の二つのラムサール条約湿地があります。この二つの湿地には、多くの渡り鳥がやってきます。特に、マガンは日本に飛来する約八割がここで越冬し、今冬は十二万羽を数えました。まさに「渡り鳥に選ばれたまち」大崎です。さらに、吉兆なのか、今冬三十四年ぶりに特別天然記念物のタンチョウ(ツル)も来訪しました。

フェスティバルの席上、うれしいプレゼントがありました。「蕪栗沼・周辺水田」に続き「化女沼」が、東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップに基づく重要生息地ネットワークへの参加が認められ、ロジャー・ジェイエンシユ事務局長から登録


認定証が授与されました。また、蕪栗沼・化女沼の皆さんと民間交流を行っている韓国昌原市チュナム貯水池からも、関係者が参加し、交流を深めました。今年には国連が定める「国際生物多様性年」です。十月には名古屋で「生物多様性条約第十回締約国会議」が開催され、本市と韓国昌原市が共に併催のイベントで、渡り鳥や湿地の保全・田んぼ文化を全世界に発信することも確認しました。鳥たちの北帰行が始まっています。三月は卒業シーズン。大崎の未来を担う青少年が夢と希望を胸に、新たな世界に羽ばたくことを念じています。

大崎市も誕生五年目。大崎地方の中心市として、大崎定住自立圏の形成を目指し、周辺自治体と連携・協力し、力強く羽ばたきます！

大崎市長 伊藤 康志

interview


第 21 回
「おおさきのあんしん・あんぜん戦略」に参加した
高橋 一郎さん(古川地域)



「災害時には日ごろの備えが大切」ということをよく耳にしますが、実際に災害が起きたとき何をすればよいのか、また自主防災組織がどのようなものかを学ぶために参加しました。
 ブランド戦略会議で学んだことは、自分たちの地域は自分たちで守るという積極的な姿勢と、いつ来るかわからない有事に備え、万全の態勢を整えておくことです。私の住んでいる地域では今年、万が一の事態を想定し、安否確認や救出訓練などを積極的に行う予定です。
 機会があれば、被災経験のある町へ赴き、実際に体験した人の話を聞いて、今後の防災活動に生かしたいと思っています。

interview

第 23 回
「生涯を通じた健康づくり市民ネットワーク」に参加した
株本 トモ子さん(松山地域)



地場産品を給食に取り入れ、子どもたちに食べさせることが安全・安心につながることや、家庭の食卓での会話や親の手料理が子どもの成長に影響するなど、食事と健康が密接にかかわっていると感じました。
 ブランド戦略会議で話された「地域内のコミュニケーションの大切さ」も、健康な生活に必要なと感じ、地域で協力し、ひとり暮らしの人や近所の人と食事をしながら気軽に話し合える「集いの場」を作りました。同じ地域に住んでいながら、なかなか顔を合わせられない人と話しをすることができ、新しい交流が生まれました。
 今後も定期的に集まり、「地域のネットワーク」を大切にしたいと思っています。